

令和 6 年 5 月 7 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19H03964

研究課題名（和文）集住での豊かな看取りを可能にする包括的ケアマネジメントモデルの開発

研究課題名（英文）Development of a comprehensive care management model to enable satisfactory end-of-life care in an elderly housing

研究代表者

大野 かおり（Ohno, Kaori）

兵庫県立大学・看護学部・教授

研究者番号：20300361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,500,000円

研究成果の概要（和文）：集住での看取りに関する医療・介護連携の実態調査を行い、その結果を基に『豊かな看取りのための包括的マネジメントモデルの素案』を導き出した。これには“ケアマネジメントの視点”として8つのプロセスがあり、『人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン』方針決定の流れに相応していた。この素案を集住施設8か所において試用したあと、アウトカム評価を実施した。その結果をもとにモデルを評価・精錬し『豊かな看取りのための包括的マネジメントモデル』を完成させた。同時に、集住施設で生活する療養者にとっての『豊かな看取り』とは何か概念分析により定義した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『生活の場でありながら住み慣れた家ではない集住で、生活者のQOL（生活の質）を最上位に置き看取りを支えるために必要な包括的ケアマネジメント（医療・介護連携）とはどのようなものか』を明らかにすることで、看護学、介護福祉学、教育学など多領域で使える実践性に富んだモデルとなる。

この成果は「看取り難民」問題に対応する一助となる。さらに看取りまで支えられる集住が実現すると、介護需要密度が上がり介護保険における居宅系サービスの収益性が高くなる。これは介護費の抑制と介護職員の人材不足問題の緩和にも貢献する。

研究成果の概要（英文）： We conducted a survey on the actual state of medical and nursing care coordination related to end-of-life care in congregate homes, and based on the results, derived a “Draft of a comprehensive care management model to enable satisfactory end-of-life care in an elderly housing”. It included eight processes as “perspectives of care management” and corresponded to the policy-making flow of the “The Practice guidelines for process of decision making regarding treatment in the end of life care”. After testing this draft in eight residential facilities, an outcome evaluation was conducted. Based on the results, the model was evaluated and refined to complete the “a comprehensive care management model to enable satisfactory end-of-life care in an elderly housing”.

At the same time, a conceptual analysis was conducted to define what “satisfactory end-of-life care” means for convalescents living in residential facilities.

研究分野：在宅看護学

キーワード：集住 看取り 包括的ケアマネジメント 医療・介護ケアマネジメント

1. 研究開始当初の背景

多死社会を目前にし「看取り難民」問題への取組が模索されている。自宅での看取りも進められているが、マンパワー不足や移動・送迎時間が業務負荷の多くを占めることなどから、高齢者の集住化も検討されている。しかし集住は地域から隔絶されている場合も多く「住みなれた地域の中での質のよい看取り」とは言い難い。さらに看取りが近づくと医療機関へ搬送される者も多く、最期まで集住で暮らすことは容易ではない。

集住でのサービス提供の方向性は一部整理されてきてはいるものの(経産省)、先行研究では特定の施設に限定された報告(古田, 2009)や、医療・介護連携に関する実態調査(藤井充他, 2013)、研究の動向調査(大河原他, 2016)がほとんどである。また工学分野での研究もまちづくりや環境に特化された内容(佐藤, 2015; 絹川他, 2013)である。これらは集住での生活や看取りを一側面から研究した成果であり、包括的に捉えたものではない。

2. 研究の目的

本研究では地域包括ケアシステムの5つの要素の視点から、集住での豊かな看取りを可能にするための包括的ケアマネジメントモデルを開発することを目的として以下を行った。

- (1) 医療・介護連携の実態調査
- (2) 集住での豊かな看取りを可能にするための包括的ケアマネジメントモデルの開発
- (3) モデルを用いた介入調査をもとにモデルの評価・精練

3. 研究の方法

(1) 集住での看取りに関する医療・介護連携の実態調査

集住施設での豊かな看取りを可能にする医療・介護連携の実態調査

- ・ 対象者: 集住20施設(都市部8, 都市部以外12)の管理者, 施設スタッフ等33名
 - ・ 調査方法・内容: 終末期ケアマネジメントのプロセスにおけるケアの実際, 医療・介護連携についてインタビュー調査
- インクルーシブなまちづくり方略 - 取り組み例の情報収集 -
- ・ 対象者: ノーマライズタウン構想などユニークな取り組みを行っている7施設
 - ・ 調査方法・内容: インタビュー調査およびグラフィックファシリテーションを用いたシニアの人生の振り返りと看取りの場WSを開催

地域特性に応じた集住施設での看取りを検討するための地域住民の意識

- ・ 対象者: 人口減少と高齢化が進む中山間地域に居住する65歳以上の地域住民5名
- ・ 調査方法・内容: 中山間地域での暮らしと看取りについて, 半構成的面接調査

(2) 集住での豊かな看取りを可能にするための包括的マネジメントモデルの開発

『豊かな看取りのための包括的マネジメントモデルの素案』の検討

- ・ 方法: 2019年度の調査結果を基にケアマネジメントモデルの素案を検討
- 在宅サービス提供者のICT活用の実態調査
- ・ 対象者: 訪問看護ステーション管理者85名, 居宅介護支援事業所管理者38名
 - ・ 調査方法・内容: ICTの活用や課題等について自記式アンケート調査
- 『豊かな看取り』の概念分析
- ・ 方法: Rodgersの概念分析法を用いて分析。2016~2020年の日本語文献26文献, 海外文献4文献を分析

(3) 包括的マネジメントモデルを用いた介入調査により, モデルの評価と精練

- ・ 対象者: A県内の集住施設8か所(特別養護老人ホーム3, グループホーム2, サービス付き高齢者向け住宅2, 有料老人ホーム1 / 都市部3か所, 中山間部5か所)
- ・ 調査方法・内容: 包括的マネジメントモデルを実際に活用し, アウトカム評価として「看取りの看護実践能力尺度」を用いた調査(前後比較)を実施。また, 包括的マネジメントモデルの実装に関する意見として, モデル使用後に施設ごとにフォーカス・グループインタビューを実施。それらの結果をもとにモデルを評価・精練

4. 研究成果

(1) 『豊かな看取り』とは

概念分析の結果, 「豊かな看取り」とは, 看取りについて本人と家族の意思決定に基づき, その意思を尊重したうえで, 家族を含めたチームによるケアを行うことによって, 最期までこころ, 時間, 環境が満ち足りている状態で生き, その状態への思いを家族や支援者と分かち合い, その人らしい最期を迎えることであると定義された。「豊かな看取り」の過程においては, まず【看取りのサポート体制】を整備することが重要である。支援者は, その人の【これまで生きてきた歴史】を大切にしつつ, 【看取りを前にした本人と家族の思い】に寄り添い, さまざまな症状の出現や日常生活の低下など【健康状態の変化や悪化】に対して適切なケアを提供するとともに【看取りに向けた準備】を整えることで, 「豊かな看取り」とすることが可能となる。「豊かな看

取り」は療養場所や治療、介護などその生き方において【本人の意思が尊重される】ことが重要である。そのためには十分に【本人や家族の思いを受け止める】ことから始めるが、本人の意思疎通が困難な場合もあり、本人と家族の穏やかな関係を保持しつつ、家族が意思決定できるなど【本人と家族のよい関係】を保つ必要もある。【家族の看取りに対する受け止め】や【家族による介護の実施】を支えて、家族も含めた【チームで関わる】。症状コントロールなど医師との連携も必要となり、【医療と介護の連携によるエンドオブライフケアの提供】に取り組む。看取り期においても【本人が自分の役割を果たす】ことが大切で、これまでの生活をできるだけ継続することを心がける。また、地域や職場など【社会とのつながりをもつ】ことで分かち合いの豊かさにつながる。「豊かな看取り」により【その人らしい最期】を迎え、支援者が家族の看取り介護を認めて慰安し、ともに偲び【家族と支援者で思いを共有】できると、残された家族には看取り介護の達成感や満足感といった【看取り後の家族の肯定的な心情】が生まれ、【家族の新しい生活のはじまり】につなげることが可能となる。支援者には自己肯定感が生まれ、実践が向上するなど【看取りを支えるチームの成長】につながる。

(2) 集住での豊かな看取りを可能にするための医療・介護連携ケアマネジメントモデルの考案

集住施設 20 か所を対象に「ケアマネジメントプロセスの枠組み」に基づいて聞き取り調査を行った結果、「入所時や看取り介護開始時の意思決定場面」「状態の変化や悪化時の支援方針決定場面」「外部のマンパワーも含めたチームでの支援が必要な場面」など多くの場面で必要になる「ケアマネジメントの視点」が得られた(図 1)。これらの場面は『人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン』方針決定の流れに相応していたため、「ケアマネジメントの視点」を方針決定の流れに組み込み(図 2)、集住施設での豊かな看取りを実現する医療・介護ケアマネジメントモデル素案を作成した。また、インクルーシブなまちづくり方略および地域住民の意識も踏まえて、『豊かな看取りのための包括的マネジメントモデルの素案』を検討した。

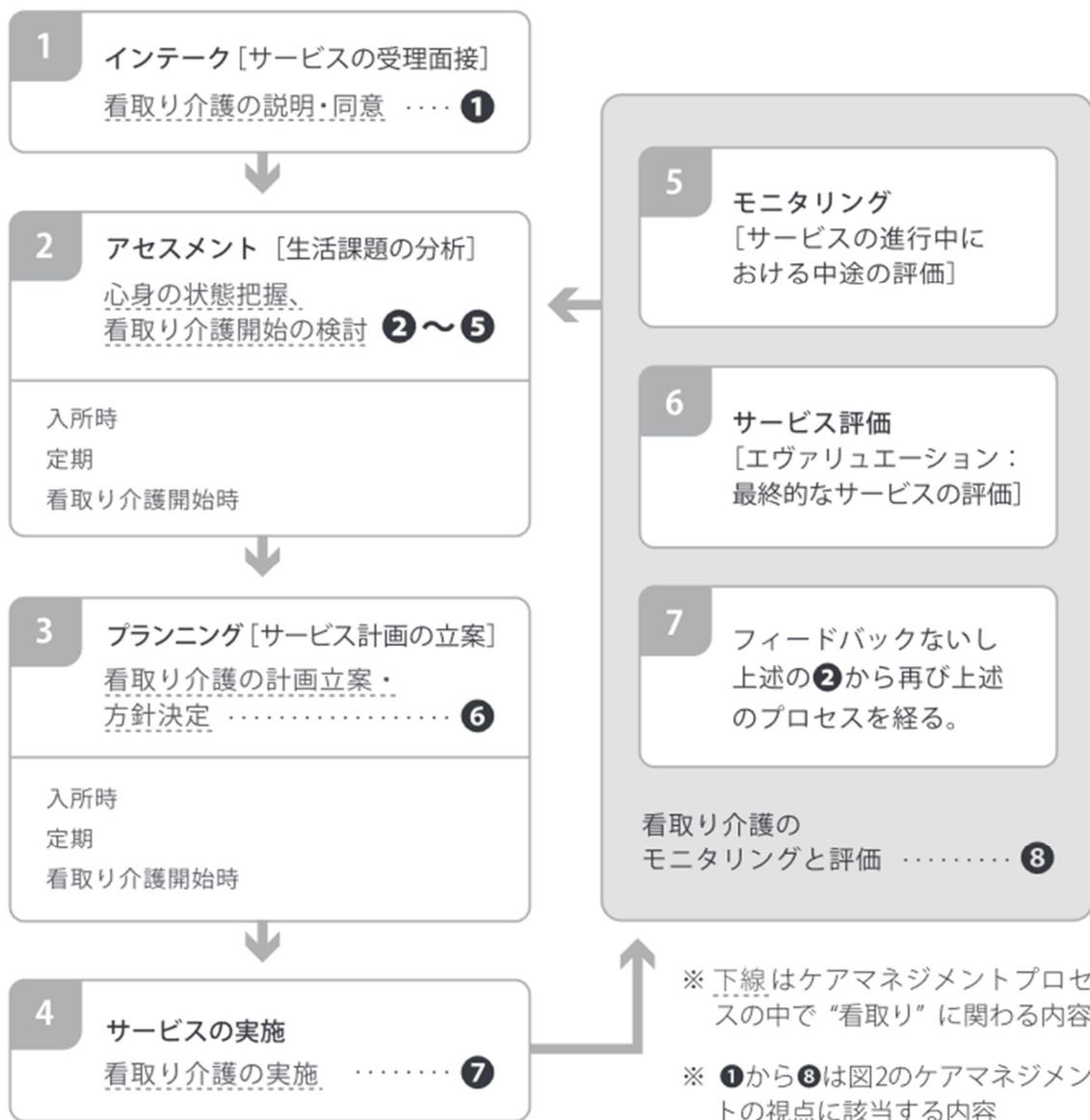


図 1. ケアマネジメントプロセスの枠組み

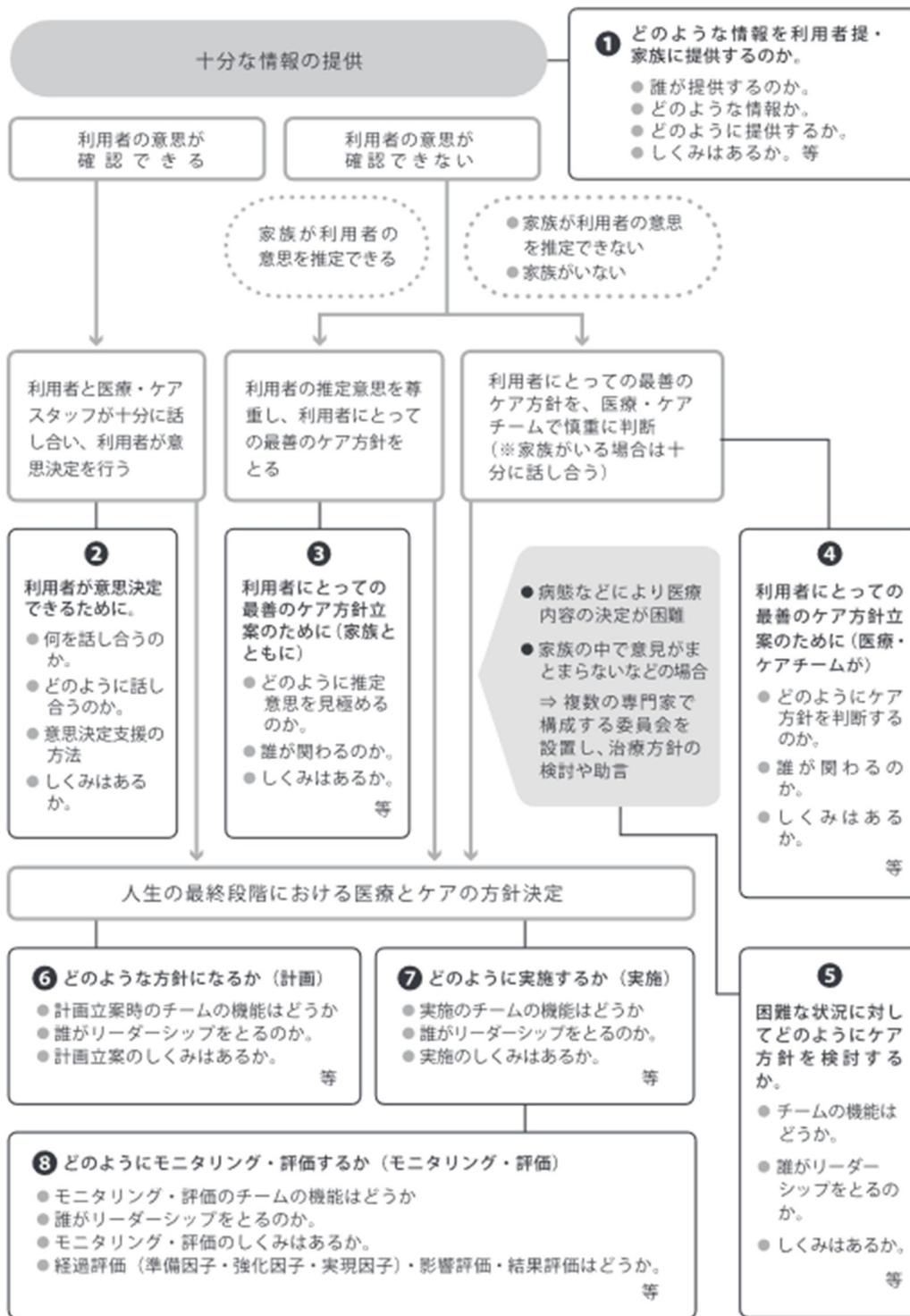


図2.「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」方針決定の流れに対応したケアマネジメントの視点

(3) 包括的マネジメントモデルを試行・評価し、モデルの精練と汎用化の検討

『豊かな看取りのための包括的マネジメントモデルの素案』を用いて、集住施設8か所(特別養護老人ホーム3,グループホーム2,サービス付き高齢者向け住宅2,有料老人ホーム1/都市部3か所,中山間部5か所)で看取り介護を実施した。

ケアマネジメントモデルを使用後のインタビュー調査では、その効果として「自己の感覚、経験で行っていたが、思いをことばにする練習になった」「スタッフ間での振り返り時に自分たちのケアを評価する手がかかりとして役だった」「施設長とスタッフの感覚にずれが生じることがあったが、それを一致させることに役だった」「実施したケアの内容や利用者の状態・反応などをスタッフ間で共有するように意識できた」「職種を超えてチームとしての一体感が得られた」「入

職後1年以内の看取りに不慣れな職員も勉強になった」「夜間の見回りなどでも、どのような状態になったら何をすべきか明確になり、対応することができた」という語りが得られた。課題として、「実施前後のアンケート結果をスタッフ一人ひとりの振り返りや成長記録として手元に置けるようにしてもよい」「スタッフの力量に差があるので、簡素化が求められる。分量が多く内容が難しかった」「意思疎通できない人への対応は変わると思う」などであった。

「看取りの看護実践能力尺度」を用いたアンケート調査（前後比較）では、158部配布し回答は73部（回収率46.2%）、看取りの実践能力に無回答であった一部を除き72部を有効回答とした（有効回答率45.5%）。回答者の所属は特養64%、サ高住20%、グループホーム14%等で、入居可能人数は平均値（標準偏差）63(25)名、職員数は56(29)名であった。性別は女性が68%、年齢は50歳台（38%）が最も多く、従事年数の平均値（標準偏差）は9.6(7.8)年であった。職種は介護職65%、医療職11%、管理職18%であった。看取りの実践能力の得点は、全ての項目で介入後に高くなっており、「予測準備的マネジメント」（ $p=.033$ ）、「安寧な臨終に向かう協働」（ $p=.050$ ）では有意に高くなっていった。従事年数別に看取りの実践能力をみた場合、2年未満と2年以上で分けた時に21項目中10項目で有意差があった。2年未満の群で特に平均値が低かったものは、「看取り時の治療・検査の見直し」「夜間の急変予測」「利用者の趣味、嗜好、生活歴を看取りのケアプランに反映」であった。他方で「介護職と看護職の協働」「他職種の意見を聞きながら方針を統一する」ことは得点が比較的高く、有意差はなかった。

以上より、ケアマネジメントモデルは有効に活用できるうえ、ケアマネジメントモデルを使用することで他職種との協働が活発になり、終末期の状態変化を予測したケアマネジメント能力が向上する効果があるとわかった。また、経験の浅いスタッフの実践能力育成にも役立つと考えられた。

インタビューで得た課題をふまえて『医療・介護ケアマネジメントモデル』に精練した（https://homenursing-cnas.jp/wp-content/themes/homenursing/pdf/pdf_matome_20240403.pdf）。

なお、集住施設で働くサービス提供者への理解を促しやすくするために、成果物は「医療・介護ケアマネジメント」というタイトルにした。

【引用文献】

- 藤井充, 佐藤さつき, 山崎洋子他: 高齢者施設における看取りの実態把握と看取りを可能にする条件に関する研究, (公財) 大同生命地域保健福祉研究助成報告書, 2013
- 古田さゆり, 小野幸子: B 特別養護老人ホームにおける看取り介護実現への取り組みと課題, 岐阜県立看護大学紀要, 10(1), 23-41, 2009
- Kaori Ohno, et al: A Study at Home Terminal Care of Cancer Patients - The Present Conditions and Problems of Actions of Home Nursing Stations, Japanese Society of Cancer Nursing First International Conference, 2003
- 絹川麻理, 趙政妃: 入居率と環境差異からみたサービス付き高齢者向け住宅の環境整備状況と選択に関わる課題, 都市住宅学, 83, 127-131, 2013
- 大河原啓文, 深堀浩樹, 廣岡佳代, 宮下光令: 日本の高齢者ケア施設における看取りの質の評価・改善に関する研究の動向, 緩和医療, 11(1), 401-412, 2016
- 大野かおり, 三上洋, 高木洋治: 超高齢社会の高齢者の栄養状態と栄養改善に関する研究, 日本老年医学会雑誌, 43(2), 222-229, 2006
- 佐藤由美: 高密度高齢者集住スポットにおける自助・互助の実態 横浜市W団地を例として, 地域創造学研究, 25(4), 45-60, 2015

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 大野 かわり, 西内 陽子, 大村 佳代子, 安田 温子, 藤本 佳子	4. 巻 25 (12)
2. 論文標題 「豊かな看取り」の概念分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地域ケアリング	6. 最初と最後の頁 56-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大野かわり, 大村佳代子, 西内陽子, 安田温子, 山本大祐
2. 発表標題 集住でのよりよい看取りの実現に向けて
3. 学会等名 第25回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大村佳代子, 大野かわり, 西内陽子, 安田温子
2. 発表標題 サービス付き高齢者向け住宅における介護体制と終末期ケア
3. 学会等名 第25回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 西内陽子, 安田温子, 大村佳代子, 大野かわり
2. 発表標題 有料老人ホームと軽費老人ホーム（ケアハウス）での看取りの現状と課題
3. 学会等名 第25回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安田温子, 大村佳代子, 西内陽子, 大野かおり
2. 発表標題 認知症対応型共同生活介護(グループホーム)での看取りの実態
3. 学会等名 第25回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Kayoko Omura, Yoko Nishiuchi, Atsuko Yasuda, Fusako Takahashi, Kaori Ohno
2. 発表標題 Characteristics of Japanese nursing facilities for elderly people and number of end-of-life care
3. 学会等名 International Nursing Confernce 2020 Taiwan (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大野かおり, 安田温子, 大村佳代子, 西内陽子
2. 発表標題 介護老人福祉施設における看取りへの取組 - 看取り介護加算 () 創設以降の状況 -
3. 学会等名 第25回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山本大祐, 大野かおり
2. 発表標題 高齢者がとらえた中山間地域で最期を迎えること
3. 学会等名 第26回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川真一, 大野かおり
2. 発表標題 在宅ケアにおけるICT活用の実態
3. 学会等名 第26回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大村佳代子, 安田温子, 藤本佳子, 大野かおり
2. 発表標題 従事年数別にみた高齢者集住施設での看取りの実践能力
3. 学会等名 第28回日本在宅ケア学会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【冊子作成】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『集住施設での豊かな看取りを実現するための医療・介護ケアマネジメントモデル』 <p>著者：大野かおり, 大村佳代子, 藤本佳子, 紀ノ本晶子 発行日：2024年2月14日</p> <p>【HP掲載】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果紹介「集住施設での豊かな看取りを実現するための医療・介護ケアマネジメントモデル」, https://homenursing-cnas.jp/research ・研究紹介「集住施設での豊かな看取りを実現するための医療・介護ケアマネジメントモデル」, https://homenursing-cnas.jp/wp-content/themes/homenursing/pdf/pdf_matome_20240403.pdf ・兵庫県立大学との共同研究 テーマは看取り, https://www.a-living.jp/hyogo/jousai/blog/index.php?page=4&ym=202307

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 大祐 (Yamamoto Daisuke) (10755820)	関西医科大学・看護学部・講師 (34417)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大村 佳代子 (Ohmura Kayoko) (30722839)	兵庫県立大学・看護学部・准教授 (24506)	
研究分担者	高橋 芙沙子 (Takahashi Fusako) (40780482)	関西医科大学・看護学部・講師 (34417)	
研究分担者	安田 温子 (Yasuda Atsuko) (40844105)	兵庫県立大学・看護学部・助教 (24506)	
研究分担者	山川 正信 (Yamakawa Masanobu) (70110567)	びわこリハビリテーション専門職大学・リハビリテーション学部・学長 (34207)	
研究分担者	大塚 毅彦 (Ohtsuka Takehiko) (80262963)	明石工業高等専門学校・建築学科・教授 (54501)	
研究分担者	藤本 佳子 (Fujimoto Keiko) (80425090)	兵庫県立大学・看護学部・客員研究員（研究員） (24506)	
研究分担者	紀ノ本 晶子 (Kinomoto Shoko) (40983482)	兵庫県立大学・看護学部・助教 (24506)	
研究分担者	西内 陽子 (Nishiuchi Yoko) (00803743)	兵庫県立大学・看護学部・代替教員 (24506)	削除：2021年1月14日

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	金 外 淑 (Kim Woesook) (90331371)	兵庫県立大学・看護学部・教授 (24506)	削除：2021年1月14日

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関